

『高知大学教育学部研究報告』第七二号

二〇一二年三月 発行

抜刷

『伊勢物語』二十一段の表現性

武久 康高

## "Isemonogatari" The Feature of Expression in Chapter Twenty-One

Yasutaka Takehisa

Faculty of Education, Kochi University

In the story "Isemonogatari", there is a chapter with the theme of a woman leaving her boyfriend. In this chapter, we learn that the "miyabi" in the story consists of a man's sight. The story, by and large, has a bad ending for the woman, but this is not true in Chapter Twenty-One. This story tells about the difficulty with which we understand each other; depicted through the woman, as the victim, gradually fading out of the scene because she is blindly fettered by strong feelings about her figure. Another important theme, written about in a previous scene in the story, is about people having many types of relationships.

## 『伊勢物語』 二十一 段の表現性

武久 康高 (高知大学教育学部)

『伊勢物語』二十一 段は、それまで仲良く暮らしてきたはずの男女が、女の家出により関係が途絶えてしまう。その後、一度よりを戻すものの結局は別れてしまふという話である。ここでは男女関係の変遷がそれぞれの歌を軸として描かれており、『伊勢物語』のなかでは長編と呼べる章段である。こうした本章段の解釈をめぐっては、出て行くのは男であるという説<sup>1</sup>や「又又」以後が後補であるという説<sup>2</sup>、またそれぞれの和歌について解釈の分かれている箇所がある<sup>3</sup>など、注釈書によって見解が異なる部分がある。そのため、なかなか分かりづらい章段の一つといえるのだが、そうした分かりづらさの要因は、また別のところにもあるように思われる。二十一 段を分析するにあたり、まずはその要因について考えてみたい。

本章段は、男のもとを女が出て行くことによって物語が展開していく。こうした「男のもとを出て行く女」といったモチーフは『伊勢物語』において散見され、それらの章段では、まさに「昔男」の物語と呼ぶのにふさわしい語りがなされている。以下、確認してみよう。

男のもとを出て行く女たちは、例えば二十八 段では「色好みなりける女」、六十二 段では「心かしくやあらざりけん、はかなき人の言につきて、人の国なりける人につかはれ」る女とされる。つまりここでは、多情であったり、思慮の足りない女として語られており、本章段においても女は、(語り手の推量という形ではあるが)「いささかなること」で出て行き、「念じわびて」男に歌をよこすなど、基本的に「堪忍せぬ」(『肖聞抄』)人物とされている。また、男のもとを出て行く話とは少しずれるが、「ねむごろにいひちぎれる女」の心変わりを描く百十二 段では「思はぬかたにたなびく」浮気な女として、さらに百四 段では、「ことなることなくて尼にな」った女が俗世を忘れられず、賀茂の祭に行く姿が描かれている。すなわち、ここでの女たちは、多情であったり思慮・我慢の足りない人物として語られているのである。

一方、出て行かれた男に関しては、その嘆きに語りの焦点があてられている。

前述した「色好みなりける女」に出て行かれた二十八段の男は、「などでかくあふごかたみになりけん水もらさじとむすびしものを」と、仲が良かった女の意外な行動に訳がわからず悲しみ、百十三段の男は、自分を忘れた女の「短き心」を嘆く。こうした男の嘆きに焦点をあてる語りは、二条后章段である四段の男にも共通するものであり、本章段においても「いといたう泣」き二首の歌を詠む男の姿が描かれている。つまり男に関しては、その悲しみに寄り添い同情するような語りがみられるのである。

また、愛の復活を望んで、「年ごろありて」（三十二段）、「心にもあらで絶えたる人のもと」（三十五段）に歌を詠みかけるなど、（必ずしも女が男のもとを出て行ったとは言えないが）待つ男の一途さを語る章段においては、そんな男の変わらぬ愛情に対して「なにも思はずやありけむ」（三十二段）、歌を返さない冷たい女の姿勢が示唆されている。ここでも女は、一途な男の愛を理解しない者として批判的に描かれるのである。さらに、紀有常のことを語った十六段では、貧しくなっても「こと人にも似ず」「心うつくし」き有常が、長年連れ添った妻の家にも文句一つ言わず、逆に心配して友に援助を頼む姿が贈答歌と共に語られている。女に出て行かれた男は、同情に値する人間であり被害者なのである。

このように「男のもとを出て行く女」およびそれに関連する話においては、男を同情的に、女を批判的に語っていく傾向が顕著であり、そうした語りのありようは話の結末部分からも確認することができる。例えば六十段や六十一段の女は、男のもとを出ていったあげくに身分の低い男と結婚し、元夫の給仕をするはめになる。その結果、身を恥じて「尼になりて山に入りてぞありける」（六十段）、「いづちいぬらんともしらず」（六十二段）といった結末を迎えることとなる。また、出て行った女とは異なるが、男を三年待てなかった二十四段の女も、その結末は「いたづらになりにけり」というものであった。古くは野口元大が『伊勢物語』について、「作者が一方的に男の立場にあるために、女性的愛情は（中略）男の『みやび』によって処理さるべき素材的与件としてしかとりあげられていないのである」と喝破したが、ここで取り上げた「男のもとを出て行く女」のモチーフについても、「男の立場からする『みやび』ともいふべき価値観に基づく語りをとまなうものと指摘できよう。いわばそこでの「みやび」とは、『昔男』の選択を絶対化した上で、その選択の理由を説明し、あるべき女のふるまいを呈示する」「『昔男』を中心とした世界像」を構成するものとしてあるのである。

さて、以上のような、『伊勢物語』における本モチーフのありようを確認したうえで二十一段をみると、特にその結末部分が大きく異なっていることがわかる。

本章段の女は、男にその本心を疑われると「中空にたちゐる雲のあともなく身のはかなくもなりにけるかな」と、寄る辺のなくなった我が身のはかなさを詠む。確かにここまでであるならば、堪忍性のない女の悲惨な末路が示唆されているとも読め、先の六十段や六十二段と同様に、「あるべき女のふるまいを呈示する」男の立場に立った語りがなされていると考えることもできる。古注釈以来、『源氏物語』「帚木」で左馬頭が語る古物語の女との類似性が指摘されているのも、基本的にこうした理解に立つものである。だが本章段はここで終らず、男も女も別の配偶者を得たため、「うとくなりにけり」という結末が語られている。つまりここでの女は別段、不幸にはならないのである。こうした本章段のあり方は、『伊勢物語』における本モチーフの語り口からみると、少々違和感を感じさせる。本稿冒頭で、本章段が分かりづらいと述べたのは、このような語りのあり方によるものである。では二十一段では、「男のもとを出て行く女」といったモチーフが用いられながらも、そこではいったいどのような問題が語られているのだろうか。

## 二

本章段の語りについて、室伏信助は以下のように述べている。

第二十一段に、相愛の男女がちよとしたことで気まずくなり、女が家出をする話があるが、そこにも「いかなりけることかありけむ」とあって、語り手がその理由に深く立ち入ることを避けている。贈答歌が七首あり、男女は互いに歌を詠み合い心を交わしたが、結局「おのが世々になりければ、うとくなりにけり」とあって破局に終わってしまう。従ってこの段の物語の進展は歌の贈答が担っており、それにすべてが託されているといった趣である。

つまり本章段においては、語り手がすべてを統括するのではなく、男女それぞれが詠む歌に物語の展開が託されているというのである。なるほど確かに、本章段を除く「男のもとを出て行く女」が描かれた章段<sup>10</sup>には女の歌が存在しない。そのため、物語の展開やその意味づけは男の歌か語り手に委ねられている。「男のもとを出て行く女」のモチーフが男本位に語られる、つまりは、女が「男の『みやび』」によって処理さるべき素材的与件」にとどまる要因の一つは、こうした不均衡にあるといえよう。しかし、本章段には三首もの女の歌がのせられ、それだけ心情が詠まれている。そのため、本モチーフがみられる他章段のように一方的に女が意味づけられるのではなく、男女の思いの重なりやすれ違いをも、歌の贈答を中心に描き出していると考えられよう。

では、それぞれの歌はどのような文脈のもとに詠まれ、そこではいったい何が語られているのだろうか。次節以降で確認してみよう。

三

むかし、男女、いとかしこく思ひかはして、こと心なかりけり。さるを、いかなる事かありけむ、いささかなることにつけて、世中を憂しと思ひて、いでていなんと思ひて、かかる歌をなんよみて、物に書きつけける。

いでていなば心かるしといひやせん

世のありさまを人はしらねば (a)

(二十一 段①)

とよみ置きて、いでていにけり。  
 まずは語り手のあり方に注目してみたい。ここでの語り手は、男女は「いとかしこく思ひかはして」いたとしている。その後、女が出て行く理由について、「いかなる事かありけむ」とその内実を疑問としつつ、「いささかなることにつけて、世中を憂しと思ひて」女は出て行くことにしたと語る。両者は深く愛し合っていたとする語り手からは、実情こそわからないが、「いささかなること」が理由で女は出て行ったとみえるのである。また、本章段後半部分において、出て行った女が男に歌をよこす場面でも、語り手はその理由を「念じわびてにやありけん、いひおこせたる」と、推量表現を用いながら否定的に語っている。つまり、基本的には男の立場に立ちつつも、男女の実情や女の心理には断定を避けているのである。

その一方で、女は出て行く際、「人」は「世のありさま」を知らないため「心かるし」というだろうという歌を残している(歌a)。この歌については、「聊なる事もあれば女の定心ならぬさま也」(『肖聞抄』)「聊の事につきては女の堪忍のなく心かるきといはん首尾なり」(『闕疑抄』)など、語り手の言葉にしたがって「堪忍せぬ」女の歌と理解するものがある。しかし、その歌の内容に即して読めば、「此女の人しれぬ憂さに倦て家出するほどの心のうちあはれにとりなしたり」(『古意』)とあるように、「人」には伝わらない「憂さに倦て家出する」悲しい女の心情が詠まれた歌と解釈できよう。女はあくまで、夫婦関係の人知れぬ被害者として自己を語っているのである。

ここで注意したいのは、こうした「世のありさま」を知らず女を非難する「人」のなかに、本章段の語り手の見方までもが含まれてしまうということである。つまり、女は「いささかなることにつけて」家を出たとする語り手の立場も、女から見ると、夫婦の実情を知らない「人」のものでしかないということになる。語

り手の見方は女の歌によって相対化されているわけである。おそらく語り手が、その実情を「いかなる事かありけむ」と推量表現を用いて語るのには、基本的に男の立場に立ちつつも、こうした女の心情・見方にも配慮を示した結果といえるだろう。つまり本章段は、物語の意味づけを語り手がすべて担っているわけではなく、語り手とは見解が異なる女側の実情の存在も示唆されているのである。

では、「人しれぬ憂さに倦て」出て行った女の歌をみた男は、どのように反応しているのだろうか。

この女、かく書き置きたるを、けしう、心置くべきこともおぼえぬを、なによりてか、かからむと、いといたう泣きて、いづかたに求めゆかむと、門にいでて、と見かう見、見けれど、いづこをはかりともおぼえざりければ、かへり入りて、

思ふかひなき世なりけり

年月をあだに契りて我やすまひし (b)

といひてながめをり。

人はいさ思ひやすらん

玉かづらおもかげにのみいと見えつつ (c) (二十一 段②)  
 ここで男が「いといたう泣く」理由は、女は「なにによりてか、かからむ」といったもの。男には女が自分に隔て心を持つ原因が思い当たらないのである。

その後、女の行方がわからない男は二首の歌を詠む。一首目(歌b)は、ともに暮らしていたときから自分の愛情は深かったにも関わらず、その思いが「かひなき」ものであったと嘆く歌。つまり、夫婦生活における自分と女との思いの懸隔に気付かされる歌といえる。また二首目(歌c)については竹岡正夫は、「人はいさ」という表現が相手に詠みかける場合に使われることから、この歌を「幻影に対して『人はいさ』と話しかけている」と解釈する<sup>11)</sup>。むろん、ここでの幻影とは男の愛着ゆえに作り出された、男の心内にある女の像であろう<sup>12)</sup>。男はそうした「おもかげ」に対して、実在の女(「人」)は自分を思ってくれているのだろうかと話しかけているのである。男にとって女は、語り手がいうように「いとかしこく思ひかはして」いたはずの存在。しかし男は、そうした「おもかげ」とは異なる女、いわば自分の捉えそこなっていた「実体としての女」ともいえるべき存在を知るのである。ここには、自分の思いが届かぬ悲しみとともに、思い合っていたはずの女のこと分が分からなくなってしまふ男の嘆きが詠まれているといえよう。つまり、女に出て行かれた男によって見つめられているのは、「思ふかひなき世なりけり」という自分と女との思いの懸隔であり、「人はいさ思ひやすら

ん」といった女への疑問なのである。

#### 四

ところで、『伊勢物語』の贈答歌のありようを検討した高木和子は、「贈答歌を複数含む章段」の特徴を「表現が照応する贈答か否かを通して、作中の人間関係の距離感を象徴的に表している場合が多い」とする。そして先の女と男の歌について、女の歌の「世」と「人」の語が、男の最初の歌（歌b）の「世」と次の歌（歌c）の「人」に引き受けられているがあまり照応していないことやその歌意から、「互いに自分の思いに囚われて相手の姿を見ていない様子である」と論じている<sup>13</sup>。確かに女の歌は、自分の憂さは「人」には分かってもええないだろうというものであり、男の歌も、女との懸隔やその不信を述べつつ、「年月をあだに契りて我やすまひし」「おもかげにのみいと見えつつ」など、自分の思いの強さを詠嘆的に述べるものとなっている。つまり両者とも、夫婦関係の破綻の原因を相手方にもとめ、自己を結婚生活破綻の被害者として認識しているのである。こうしたなか、出て行った女から男に歌が届く。ここで女は、男にせめて忘れられたくないという趣旨の歌を贈り、その様子を語り手は、「念じわびてにやありけん」と推量表現ながら「堪忍せぬ」女の行動としている。やはり語り手は、「男のもとを出て行く女」のモチーフにそった男本位の語りをおこなっていくのである。しかし、こうした語り手の見解と女の認識との異なりは先に示唆されており（歌a）、その懸隔は以下の贈答歌を通じて、より露わなものになっていく。確認してみよう。

この女、いと久しくありて、念じわびてにやありけん、いひおこせたる、  
今はとて忘るる草のたねをだに

人の心にまかせずもがな（d）

返し、

忘草植うとだに聞く物ならば

思ひけりとはしりもしなまし（e）

又々、ありしよりけにいひかはして、男

忘るらんと思ふ心のうたがひに

ありしよりけに物ぞ悲しき（f）

返し、

中空にたちゐる雲のあともなく

身のはかなくもなりにけるかな（g）

とはいひけれど、おのが世々になりければ、うとくなりけり。

（二十一 段③）

まずは女の歌の内容に注目する（歌d）。ここで女は、せめて男の心に「忘るる草」の「たね」だけでも植えさせたくないと詠んでいる。こうした「忘草」の「たね」を植えるという表現は、例えば『古今和歌集』の用例をみれば、①自分の心に植えたい⇨自分が恋の辛さから解放されたいという場合（「忘草たね採らましを逢ふことのいとかくかたき物と知りせば」恋五・七六五・よみ人しらず、など）と、②相手の心に生えている⇨自分を忘れようとする不実な相手に対する場合（「忘草何をか種と思しはつれなき人の心なりけり」恋五・八〇二・素性法師、など）とがあり、この女の歌は、後者に近い詠みぶりになっていると考えられる。つまり女は、自分を忘れようとするつれない男に、せめて忘れられたいと詠んでいるのである。こうした女の歌は、テキストの語り（「堪忍せぬ」女の行動として示唆する語り手の意味づけや、女の突然の行動を嘆く男の様子）にしたがって読みすすめていくと、少し奇妙にうつる。だが、女の視点に立ってみると、男が原因の「人しれぬ憂さ」に「倦て」女は「家出」するなど、男のせいで結婚生活は破綻した。しかしそれでもせめて忘れられたくないという気持ちを、この歌に託していると読み取ることができる。いわば「待つ女」ともいうべき詠みぶりとなっているのである。

一方、こうした女の歌に対し男は返歌をする（歌e）。この歌は、「忘草植う」などの対象が、男と女のどちらかということでは解釈が分かれている<sup>14</sup>。どちらにも解釈できるのだが、ここでは、先に男が「人はいさ思ひやすらん」（歌c）と女のことからなくなった悲しみを詠んでいることとの繋がり重視して、「愚見抄」（「忘草をそなたにうゆるときくならば、さては我をわすれがたさにするぞと思ふべしと也」）などが解くように、「忘れ草植う」の主体を女とし、男が女の愛情の有無を確かめた歌として理解したい。つまり男は、「忘れられたくない」（「忘草」用例②の意味を利用）と女に訴えられたため、その「忘草」を①の意味にとりなして返歌（恋のつらさを忘れるため女が「忘草」を植えただけでも聞きたい）をする。そうした贈答をすることで、女に気持ちの告白とともに自分との心の交流を求めているのである。

その後、二人は以前にもまして歌を詠み交わす。しかし、そこで本章段に語られた男の歌は、女が用いた「忘草」②の意味（歌d）を、逆に不実な女の心に当てはめつつ、自分が女から忘れられる悲しみを詠むものであった（歌f）。ここで男は、「ありしよりけに物ぞ悲しき」と、女が出て行ってしまった時よりも、

実際に歌のやり取りをしている今のほうが悲しいと訴えているのである。これはどういうことだろうか。

男は女が出て行った後、二首の歌を詠んだ（歌b・c）。そこでは、自分の思いの強さとともに「思ふかひなき世なりけり」という自分と女との思いの懸隔や「人はいさ思ひやすらん」といった女への疑問が詠まれていた。しかし現在、「ありしよりけにいひかはして」いるのにも関わらず、女は自分を「忘るらん」との疑いが生じ、悲しみがつのる。つまり、女とやり取りをするにつれて、男の「おもかげ」にある女（「いとかしこく思ひかはして」いた存在）と「実体としての女」との異なりが男のなかで決定的となり、そのため相手のことが理解できなくなってきたということであろう。コミュニケーションをとればとるほど理解は深まるどころか、相手のことが分からなくなってしまっているのである。

この男の歌に対して女は、寄る辺のなくなった我が身のはかなさを詠む（歌g）。後に『新古今和歌集』恋五の部にも採録される、男に忘れられる悲しい女の歌である<sup>15</sup>。ここで注目したいのは、この女の歌は男の疑問（忘るらんと思ふ心のうたがひ）にはいっさい答えず、「発想も表現も」「男の贈歌とはかけ離れたものになっていないこと」<sup>16</sup>、その一方で内容的には、「せめて男に忘れられたくない」と詠んだ自分の歌（歌d）とのみ対応している点である。つまりここで女と男との間に歌を介した対話は成り立っておらず、女は一貫して被害者としての自己の姿（「せめて忘れられたくない」と相手に訴えたが、結局は忘れられ、はかなき身になってしまう私）を歌うのである。

このように女の歌には、男の歌（歌f）とのつながりがほとんど認められない。この歌を後補とする説が出てくるゆえんである。だが、こうした贈答歌における表現や発想の断絶は、高木和子がいうように「作中の人間関係の距離感を象徴的に表している」箇所と読むべきであろう<sup>17</sup>。つまりここでの納まりの悪い女の歌は、男と女との思いの懸隔が象徴されているのであり、さらにはこうした女の嘆き自体が、男や語り手にとって了解不能なものとして語りだされているとみることができよう。

\*

以上、二十一一段の男女のようすを歌を中心に確認したが、そこにみられるのは、分かり合っていたはずの女が男にとって「他者」となっていく様子であり、その一方で被害者としての「自分の思いに囚われ」「相手の姿を見えない」ように語られる女の姿であった。むろん本章段でも、結局は男の愛を女が失ってしまうところを重視すれば、他の「男のもとを出て行く女」の話のように、「男にとっ

て理解できない女」として否定的に描かれていると捉えることも可能である。だが、前述したように本章段の結末は、男の嘆きや女への断罪ではなく、互いに別の配偶者ができたため「うとくなりにけり」といった、両者の別れとなっている。こうした点を考慮すれば、男本位の語りをもつ「男のもとを出て行く女」の話をとめない本章段が語っているものとは、歌のやり取りを通じても相手への理解は深まらず、逆に懸隔のみが明らかになるといった、人と人との分かりあえなさといえるであろう。そしてそこの女は、語り手や男にとって理解不能な「他者」として存在しているのである。

## 五

このように二十一一段では、「男のもとを出て行く女」のモチーフをとめないながら、人と分かりあうことの困難さが語られているといえる。しかしこうした人間関係のありようは、人と人とが歌を通じて関わりあう様を描いた『伊勢物語』において、一方でみつめられていたテーマであると考えられる。というのも、男の一代記風に整えられた『伊勢物語』の「終焉」直前に置かれた百二十四段には、配列上、人生を振り返っての思いと読める次の歌が詠まれているからである。

むかし、男、いかなること思ひけるをりにかよめる。

思ふこといはでただにぞやみぬべき

われとひとしき人しなれば

（百二十四段）

ここには「われとひとしき人」の不在、つまりは「自分と思いや感覚を共有してくれる人」などいない」という認識から、「思ふこと」を伝えることを諦める男の姿がみられる。こうした男の思いは、例えば『昔男』が歌をもって女の魂をゆさぶり動かす力は、「へいろごのみ」の力とあってよい」などと評されるがごとく<sup>18</sup>、自分の「思ふこと」を託した歌でもって相手の心をゆさぶり、共感を求め続けた男の、その人生そのものを断念するかのような響きをもつといえよう。つまり、歌を媒介に「われとひとしき人」を求め続けた男の一代記は皮肉にも、人と分かりあうことの不可能性といった認識をもってその物語が閉じられていくのである。そして、こうした認識に至る具体は、例えば二十一一段のように、『伊勢物語』のなかで物語化されているのであった。

ところで、本章段のような男の持つ女像と女の自己像との懸隔や認識のずれ、あるいは人と分かり合うことの困難さといった問題は、その後の『蜻蛉日記』や『源氏物語』といった女性の手による作品によって深められていくテーマであった。本稿では、そうしたテーマにも連なりうる問題の一端が『伊勢物語』におい

でも見られること、またそれは「男の立場からする『みやび』」といえる。『男のもとを出て行く女』のモチーフをとまなう二十一段においては、女が男や語り手にとって「他者」となっていく、相手との懸隔が明らかとなる様を通じてなされていることを指摘しておきたい。やはり『伊勢物語』では、本章段のように三首もの歌を通じて描き出される女の嘆きも男には理解不能なものとされ、結局は被害者としての「自分の思いに囚われ」「相手の姿を見ていない」姿を浮かび上がらせるにとどまるのである。「他者」の行動として描かれる女の嘆きが焦点化され問題化されるには、こうして「他者」とされた女による自己語りの登場を待たねばならないのである。

1 例えは『知頭抄』は、「なりひら」が「いでていにしとき」の歌とし、『よしやあしや』は、出て行ったのが女であるならば「この女、かく書きたる」ではなく「この女の」となるはずであるとか、残された人物の「いたう打なきて」以下の行動が「深き窓の内に養はれて、戸外をしらぬをんな子」の様子であるなどとする。なお、古注・新注の引用は、竹岡正夫『伊勢物語全評釈 古注釈十一種集成』（右文書院、一九八七・四）による。

2 新潮日本古典集成『伊勢物語』二十一段頭注など。こうした議論は、本章段の分かりづらさ（最後の女の歌が贈答の体をなしていないことやその結末のありようなど）を解消しようとする一つの考え方だと思われる。だが、本稿ではそうした立場をとらず、二十一段全体でどのような問題が語られているのか考へたい。

3 語の解釈が分かれているところを各歌からいくつか挙げてみる。【歌a】「世のありさま」↓男女のありさま／世の習い。【歌b】「世」↓男女の仲／この世の中。「我やすまひし」↓疑問／反語。【歌c】「おもかげ」↓男の女への思い故／女が男を思っている故。【歌d】「人の心」↓男の心／出て行った自分（女）の心。「まかせず」↓蒔かせず／蒔かせずと任せずとの掛詞。

【歌e】「忘草植う」↓女が植える／男が植える。【歌f】「忘るらん」↓忘れられるだろう／忘れていられるだろう。【歌g】女の嘆きの理由↓男に疑われたため／自省による、など。紙幅の関係でこの一々について論じることが控えるが、本稿の読み大きく関わる部分については論文中で言及する。

4 木下美佳は、『伊勢物語』の中核をなす章段』では「男の悲しみの対象を細かに語ることも激しく泣き悲しむ昔男に重点を置いており、泣く姿へと物

語を収斂させていく」独自の物語構成があること（泣く昔男―『伊勢物語』

の物語構成―『詞林』三六号、二〇〇四）、さらに『伊勢物語』には、「色好み」「つれなし」と冠される女から翻弄され、恋に苦しむ男の姿も描かれていることから、『伊勢物語』とは、昔男の悲しみを描く作品、と言えるのではないだろうか」と論じる（翻弄される昔男―『伊勢物語』の「色好み」「つれなし」と冠される女を視点として―『語文』八八号、二〇〇七）。こうした男の姿は『男のもとを出て行く女』のモチーフにも見られるものである。

5 野口元大「みやびと愛」『日本文学』一九六一・五。

6 竹村信治「レックス5『伊勢物語』23段」〔言述論101 説話集論〕笠間書院、二〇〇三・五）。

なお、本稿が『伊勢物語』にみられるモチーフに注目した理由を以下に述べる。渡辺実は、『みやび』の主題」が「全『伊勢物語』を貫流するテーマ」であり、そこには『みやび』を尺度とする人物評価の態度」がみられるとする。そして『伊勢物語』に登場する男女の「いちいちの言動」の記述が、そのまま『みやび』の審判」にかけられた「評語の実質を帯び」ていると指摘している（解説 伊勢物語の世界」（新潮日本古典集成『伊勢物語』一九七六・七）。こうした『伊勢物語』の評価のありよう、ひいてはそのような評価の尺度（『伊勢物語』の世界像）を構成する「みやび」の特質の一端をあきらかにするには、シチュエーションや登場人物の言動等に類型性を持つ物語モチーフの語られ方を分析するのが効果的であると考えられる。よって本稿では、『伊勢物語』に散見される『男のもとを出て行く女』といったモチーフに注目した。

7 例えは『闕疑抄』は、本章段の女と「帚木」の女は「堪忍性のなき」ところが似ており、さらに「帚木」に「女房などの物がたりよみしを聞て、いと哀にかなしく、心ふかき事かなと、涙をさへおとし侍し」とあれば、此物語の事などにもあるべきか。いさゝかかはる所なし」と指摘する。

8 二十一段の分かりにくさは、章段の並びからも指摘できる。石田讓二は二十二段を「二一段の姉妹作として制作されたとおぼしき節々が指摘」できるため、両章段を「対比において読まざるべきもの」とする（石田讓二『伊勢物語注釈稿』竹林舎、二〇〇四）。ここで両章段を対比として読むならば、男の愛を失った女の話（二十一段）と男の愛を取り戻した女の話（二十二段）ということになる。いわば本章段は、「どうすれば男の愛情をつなぎとめ得るかということに矮小化してしまった」女にとっての「みやび」を「説き教える」話（片桐洋一『伊勢物語根本―その虚構と方法』源氏物語とその周辺』武蔵野書院、一

九七一」といえる。しかし、そう考えてもやはり、二十一一段結末の、男も女も別の配偶者を得たため、「うとくなりにけり」という部分がうまく解釈できない。よって稿者は、従来からなされてきた、本章段を「男本位」の語りがなされているものとしてのみ理解する読みを変更する必要があると考える。

9 室伏信助「伊勢物語終焉歌の周辺」〔『跡見学園女子大学国文科報』一九八四・三〕。

10 確かに「男のもとを出て行く女」の話題がみられるのは、本章段の他に、紀有常の妻が尼になる十六段、色好みの女が登場する二十八段、夫以外の男について女が出て行く六十段・六十二段である。また、二条后章段である四段や「ことなることなくて尼になれる人」が登場する百四段なども、同種の章段と考えた。

11 竹岡正夫『伊勢物語全評釈 古注釈十一種集成』（右文書院、一九八七・四）。  
12 「おもかげ」に見えるのは、こちらが相手を思っている場合（「目離るとも思はえなくに忘らるる時しなればおもかげに立つ」四十六段など）と相手はこちらを思っている場合（「百年に一年たらぬつくも髪われを恋ふらしおもかげに立つ」六十三段など）がある。ここでは、男が女を思っているがゆえに「おもかげ」に見えると解釈した。

13 高木和子「贈答歌の作法―伊勢物語の贈答歌」〔『女から詠む歌 源氏物語の贈答歌』青簡社、二〇〇八・五〕。

14 例えは、「忘草植う」のは男↓拾穂抄（師説）、臆断、古意、女↓愚見抄、肖聞抄、童子問、新釈など。

15 例えは泉州本『伊勢物語』には、「むかし、男、ある人に忍びてあひ通ひければ、この男にある人／中空にたちゐる雲のあともなく身のはかなくもなりぬべきかな」と語に少々異動はあるが、当該歌が別の文脈で用いられている章段があり、ここでは、忍んで通う頼みがない男を待つ女の歌として意味づけられている。このように当該歌は、その内容としてはつれない男を待つ女の歌といえる。

16 高木前掲書。

17 高木前掲書。

18 鈴木日出男「色好みの成立」〔『国文学』一九九一・九〕。  
※『伊勢物語』本文は、新編古典文学全集による。



"Isemonogatari" The Feature of Expression in Chapter Twenty-One

Yasutaka Takehisa